たくさんの選択肢があって、いろいろな人とのつながりがあって。働くって、本来は楽しいものだと思うんです。

「ネパリ・バザーロ」取締役　高橋百合香さん

国際協力であると同時に、ビジネスとしての側面もあわせ持つフェアトレード（FT）で働く。
それって、正直どんな感じ？　楽しいですか？　タイヘンですか？
ネパールの生産者とともに、服作り、食品作りなどのFTに取り組む
「ネパリ・バザーロ」で働く高橋百合香さんに、お話を聞かせていただきました。

抱いていたイメージとは違う、「モヤモヤ」からのスタート

―― 学生時代から国際協力の仕事を志望していたのですか？

高橋さん　「途上国の子どもの笑顔に何か心惹かれる…」という程度のささやかな興味でしたが、現地に行ってみたいと思い、大学4年の秋に思いきって休学し、インドの農村に半年間滞在しました。村の子どもたちに英語を教えながら、文化交流をするというプログラムに参加したんです。

―― 英語を教える！　スゴいですね。

高橋さん　ところがこれが全然ダメで（笑）。満足に話すことさえできなくて。文化交流どころか、ストリートの子どもたちに追いかけられたりして、はじめはすごく怖かった……。

―― 追いかけられた？

高橋さん　お菓子を食べながら歩いていたら、数人の子どもたちがワッと群がってきたんです。みんな、目つきがものすごく怖くて……。それまで抱いていた「かわいくて清らか」な子どものイメージがガラッと変わりました。きれいごとじゃないんだ。甘かったんだ。「一体何しに来たんだろう」って、かなり落ち込みました。それにもうひとつ、私、インドの雑貨がとても好きだったので、「たくさん買って帰りたい」なんて呑気なことも考えていたのですが、実際に手に取ってみると品質があまりよくない。売っている人も全然楽しそうじゃない。何となく腑に落ちないまま半年が過ぎ、モヤモヤとともに帰国した、という感じでした。

―― その「モヤモヤ」を、次にどうつなげたのですか？

高橋さん　体験したことを、いろいろな人に話しました。会う人会う人に、自分が見たこと、感じたことを話しまくったんです。そうやって出会ったのがネパリ・バザーロ。知人のひとりが「こういう団体があるよ」って教えてくれたんです。「絶対にここで働きたい！」と思って、すぐに面接を申し込みました。

「うちで働きたいなら、退路を断って来なさい」

―― インド滞在経験もあるし、バッチリだったのでは？

高橋さん　いえいえ、とんでもない。想像以上にきびしい面接でした。「本当にここで働き続ける気持ちがあるのか？途中で辞めてしまう可能性もあるのではないか？」と。

―― 圧迫面接……ですか？

高橋さん　いえ、違います。そんなふうには感じませんでした。あとで知らされたのですが、その当時、連れ合いやパートナーの都合で仕事を辞めてしまう女性スタッフが少なくなかったそうなのです。面接のときだけやる気をアピールして、自己都合であっさり辞めてしまう。そんな無責任な気持ちで来られては困る、と。「そんなにうちで働きたいなら、退路を断って来なさい」と言われました。

―― 退路を断つ。きびしい言葉です。

高橋さん　たしかに。でも、この言葉で決心がつきました。「もうあれこれ考えなくていい。ここでがんばろう」って。きびしい言葉に、ひるむどころかむしろ救われたような気持ちでした。その後、卒業まではボランティアとして働き、念願のネパール出張にも同行しましたが、はじめのうちはカバン持ちさえさせてもらえませんでした。「仕事で海外に行く」なんていうと、一見華やかでカッコよく聞えるかもしれませんが、そのときの私はただ見ているだけ。生産者と代表がやりとりするのをだまって見ていることしかできませんでしたが、そのやりとりを見ているうちに、ひとつ気づいたことがあったんです。

―― 気づいたこと？

高橋さん　代表は、ネパールの生産者と、仕事の話だけでなくプライベートの話もたくさんしていました。困ったことはないか、不安に感じていることはないか。くり返し話しているうちに、生産者の表情がどんどん明るくなっていくんです。ネパールは、停電も多いし物価も安定しない。日々の暮らしだけでせいいっぱい、半年先の見通しすらままならないという人が多いのです。そんな生産者にとって、

親身に話を聴いて、先の人生をともに考えてくれる人の存在って、すごく大事なんじゃないかって。

――話を聴く、対話する。仕事の基本ですね。

高橋さん　ささいなことのくり返しと積み重ね、なんですよね。生産者に行なう縫製指導にしてもそう。同じことを何度もくり返して、こうしてほしいということをねばり強く伝えていく。いいものをつくるのも、人間関係を築くのも、地道な作業のくり返しであって、近道や魔法があるわけじゃない。でも、もしかしたら、それなら私にもできるかもしれない。特別なことはできないけれど、地道にねばり強く続けることならやれるかもしれないと直感したんです。自分で言うのもなんですが、私、負けず嫌いなところがありまして（笑）。

プレッシャーのあまり、記憶が真っ白……

――本格的キャリアへの第一歩ですね。

高橋さん　まだまだです。その後何年かして、ようやく仕事を任されるようになって、一人でネパール出張に行かせてもらえるようになりましたが、そこでも大きな壁にぶつかりました。開発部の仕事は、生地や素材に問題がないかどうかをチェックし、問題がある場合はどこをどう直すか、具体的に指示を出すことなんですが、これが本当にむずかしい。織り上がった生地を手にした生産者グループのリーダーたちを前に、OKかどうか、私自身が判断を下さなくてはならない、ということがありました。生地についての専門知識も、アパレルで働いた経験もない自分にとって、頼りになるのは布に触れた指先の感触だけ。できるだけ均一に美しく仕上がっているかどうか、その服を作るのに適切な厚みがあるか、私の感覚で判断するしかありません。「織り直しをお願いしたほうがいいかもしれない」という気持ちも頭をよぎったのですが、曖昧な根拠で織り直しをお願いするわけにはいかない。さりとてOKを出す自信もなく、ベテランのリーダーたちに判断を迫られるなか、途方に暮れてしまったことがありました。

――上司に相談することはできなかったのですか？

高橋さん　もちろん、代表にメールで連絡をして現状を伝え、どうすべきか相談をしました。でも、生地の現物に触れているのは私だけ。最終的には、私自身が決めるしかない。「あなたが決めていい。あなたの判断に任せます」と代表に言ってもらえたので、そのときは思いきってOKを出しました。

――結果はどうでしたか？

高橋さん　生地を持ち帰って代表に見せたところ、「これなら大丈夫」と何とかOKをもらえました。判断を誤らずに済んでホッとしましたが、じつをいうと、そのときのやりとりをあまりよく覚えていないんです。ものすごい緊張とプレッシャーで、記憶が真っ白……。

「生産者は北極星」という教え

――判断の基準は、自分自身で決めるしかない？

高橋さん　責任をもって判断するのは重要ですが、自己流で勝手に決めていいということではないと思います。ネパリ・バザーロの場合は、「判断に迷ったら『生産者にとって良いか悪いか』で決めなさい。『ネパリにとって』は二の次でいい。生産者は北極星、ということを忘れないように」と代表から言われています。

――生産者の状況を中心に物事を考えなさい、ということですね。

高橋さん　ネパリの商品に、「トゥリさんのカゴ」という、美しい焦げ茶色の竹細工がありました。ところが、到着した商品の色がくすんで汚く見える。これでは高級感が出ない。まずいと思った私はクレームの連絡を入れ、何が起きているのか確認をしに現地へ行きましたが、生産現場を見れば、その理由は一目瞭然でした。

――何があったのでしょう？

高橋さん　水不足です。染めにはたくさんの水が必要なのですが、そのとき現場では、飲料水や生活用水にも事欠くほど、水が不足していたのです。ネパールの多くの村には水道がありません。学校に行く前に子どもたちが水汲みをしてタンクに貯めた水を使うのです。こういう状況のなかで「もっと水を使ってきれいに染めてくれ」とはとても言えません。生産者への負担を減らせば、品質が二の次になることもありますが、お客様に現地の事情をお伝えし、ご理解いただけるよう務めています。

――機械製品と手仕事の、大きな違いですね。

高橋さん　お客様に喜んでいただける品質を目指す。これは当たり前のことですが、機械が作り出すような均一性を過剰に求めるのもどうなんでしょうか。多少不均一でも、手仕事には手仕事ならではの魅力が、人の手が作り出す温かみがあります。お金とモノの交換だけではない、人と人がつながる豊かなやりとりがフェアトレードにはあると思うのです。仕事ですから、たいへんなこともたくさんありますが、私はこの仕事が本当に好き。毎日働くのが、とても楽しいです。

――就活、就職でつらい思いをしている人が、今、日本には大勢います。

高橋さん　ネパリ・バザーロにも、就業体験でたくさんの高校生や大学生がやって来ますが、みな就職や仕事に対して「怖い」イメージを持っているように感じます。就職するには、自分らしさを押し殺して、人を蹴落とさなければならない。社会に出て働くのは、ものすごくたいへんで怖いこと。そう思っている学生さんが少なくないですよね。でも、そんなことは決してない。価値観を少し変えれば、おのずとたくさんの選択肢が見えてくると思うんです。大学時代の私もそうでした。「人と同じようにしなければ」という縛りをなくしたら、生きること、働くことの楽しさが何となく見えてきた。働くって、本当は自分を自由にしてくれるものだし、人とのつながりをもたらしてくれる楽しいものなんじゃないかなって。そんなふうに思うんですよね。